



塩尻の文学 (作家編)



takako

古田晁（1906-1973）

筑摩書房創立者。塩尻市北小野生まれ。

平成六年、古田晁の生家と土蔵が塩尻市に寄贈され、平成八年に古田晁記念館が開設されました。土蔵二階には、多くの作家達が創作活動をした和室があります。平成十二年には母屋も寄贈され記念館となりました。

また、古田家のご遺族より、筑摩書房の出版物を定期的に寄贈いただいております。塩尻市立図書館では、「古田文庫」のコーナーが設けられています。

古田晁記念館は、平成21年3月に国登録有形文化財に登録されました。

○古田晁記念館・展示室

建築年代：昭和前期

特徴：敷地の西寄りに東面して建つ。桁行11m梁間5.5m、2階建、寄棟造棧瓦葺で、東面に下屋を付ける。土蔵造を基本として、1階周囲を腰まで海鼠壁とする。2階は座敷3室を配し、廊下などの開口を広く設けてガラス窓を建て、開放的なつくりとする。

○古田晁記念館・渡廊下

建築年代：昭和前期

特徴：展示室2階の東面南端と本館との間を繋ぐ廊下で、木造2階建、切妻造銅板葺、やや傾斜して架け渡した丸太を土台とし、柱を建て、全柱間に廊下の傾斜に合わせて菱形としたガラス戸を入れる。化粧屋根裏天井にも丸太を使用し、軽快な数寄屋風意匠でまとめる。

「松の木の机—古田晁氏を偲んで—」（池田三四郎随筆論文集 沖積舎）

池田三四郎 （1909-1999）

昭和四十九年一月号の雑誌『展望』の唐木順三氏（以後敬称は省略させていただく）の「古田晁に先立たれて」という文章の中に、「昭和三十六年九月の第二号室戸台風で古田一族の墓地の五葉松が倒れた。これは樹齢何百年の巨木で、それで造った大きな座机を私は貰った。現にその机に向かってこれを書いている。厚さは一寸もあろう。手ざわりはやわらかく、あたたかで、しぶく光っている……」という件りがある。

この松の座卓は実は私の処で作ったものである。松本市の葭町の「ちとせ」で知り合いになって、よく飲んだ旧小野村の村長、故小野一良が、工場に使いに来て、実は古田晁が家を新築した時、いろいろの文芸家にお祝いをもらったお返しとして、台風で倒れた樹齢五百年くらいの大木があるが、それを材料として和机をいくつか作ってくれぬかという話であった。〔中略〕

その後、松材が高騰して一般の潤葉樹材より高くなったことと、私の処の技術も向上して主材を桜材などに切り換えたため、いつの間にか松材の家具作りは遠のいてしまっていたが、世にときめく筑摩書房の古田



社長の贈りものとなれば、どんな有名な小説家の処へ納まるかも知れず、大いに興味を覚えて旧小野村まで出かけてその松の原木を見せてもらうことになった。

そして早速デザインを起こし、製材の上、十分に人工乾燥を施してから加工したが、塗装は普通仕上げとせず、上質の漆で拭き、漆を何回か掛けて完成した。〔中略〕

「敗戦前日記」中央公論社

中野重治（1902-1979）手記を執筆するために古田の実家へ行く。

1944年（昭和19年）

八月十二日 土曜日

ハレ

十二時三十何分デ発。（物スゴイ人）鉄道ノ男窓カラノリコミモンチャク。兵隊（少佐家族ツレ）少将ナド。兵隊ノ御骨四ツバカリ、甲州ト信州トノモノ。七時スギ小野着。

八月十三日 日曜日

晴

昨夜ノパン飯。ナス、青トウガラシ、ツケモノ、汁（魚）、肉フライ、タマネギ、インゲン、トマト、アスパラガス、キウリモミ。今朝メシ前オ茶、青梅。老翁ノユダヤ人ノ話ヲキク。ミソ汁。青トウガラシ。ソノ他。カボチャ前ノ庭70本ノ由。サツマイモカリン糖。青リンゴ1ヶ。不折、小薺女史。〔中略〕

「含羞の人」文藝春秋 野原一夫（1922-1999）

二十九年の秋、信州への社員旅行があった。夜行列車に乗って、朝、塩尻の一つ手前の小野駅に着いた。歩いて十分ほどの、往還に沿って古田さんの生家がある。二、三日前から古田さんは奥さんと共に帰郷し、接待の準備をしていた。襖をとりはずした広い座敷には朝食の膳が並び、鰻の蒲焼、鯉のあらい、鯉こく、鶺鴒（つぐみ）、蜂の子、山菜など、郷土料理の大御馳走である。五十人を超す多人数だからその準備もたいへんだっただろう。特にこれだけの量の蜂の子を集めるのは容易なことではなく、村の子供たちを動員して一週間以上もかかったということだった。〔中略〕

「蛙のうた」筑摩書房 臼井吉見（1905-1987）

八月十五日

古田晁は、中学以来の相棒で、大学時代は、下宿も同じだった。倫理学科の卒業を前にし

た彼から、今後の針路について相談をかけられたとき、僕は言下に、出版をやれ、といった。この煽動は彼として思いがけないものだったらしいが、独特の勤で、即座に期するところがあったらしい。さっそく、郷里の先輩岩波書店主をたずねた。岩波氏の意見は、はっきりしたものだ。出版など失敗するにきまっている、絶対にやめろ、というのである。やはり同郷の古今書院主の答えも同じだった。あきらめた彼は、カリフォルニアへ渡った。そこで貿易商を営んでいた彼の父は、ひとり息子が大学を終えて、手伝いに来てくれるのを待っていたのである。〔中略〕

筑摩書房は、西銀座の小さな貸ビルに陣取った。さて、だれのどんな本を出したものか？ 駈出しの出版社などが、ねらいをつけた著者にやすやすと承諾してもらえようはずはない。

僕のまず考えたのは中野重治だった。僕が東京の大学へ来たとき、正門前の書店で手にした同人雑誌に「驢馬」というのがあった。「辻馬車」「山藪」「青空」「風車」など、いくつか出ていた同人雑誌のなかで、とりわけ、薄っぺらだったが、表紙いっぱい書かれた誌名の書体がすがすがしかった。〔中略〕

作品集「柴笛」は「柴笛詩集」と題する小品十篇と短編「狩獵」と、連作形式の短編集「少年時代」とから成る。「後期」の日附は、昭和二十年七月二十九日となっている。敗戦の日に先立つ半月あまりということになる。

これらの原稿は、作者から少しずつ、手渡されるにつれて、筑摩書房によって、写しがとられていった。いつ、どこで空襲で焼かれるか、油断もすきもなかったかれである。作者が最後の原稿を渡し終ったのは、七月三十日であった。古田晁はそれを携えて、八月五日、松本行きの新宿発列車に乗った。上林暁の「夏曆」は、松本の信濃毎日新聞支社で印刷することになっていたが、これは伊那町の印刷所との間に話が進められていた。百方工面して、トラックを見つけ、紙もすでに送ってあった。

午前十一時ごろ、列車が与瀬附近まで来たとき、アメリカ機が見つけて、しつこく機銃掃射をあびさせて来た。たちまち乗客のなかに、死傷者が出た。

腰をおろしていた古田晁が、つんのめるように、ひれ伏したとき、とび来たった銃弾は、彼の前に腰かけていた乗客ふたりを貫いた。いずれも即死した。ひとり額は額から頭を貫かれ、したたる血が、古田晁の読んでいた「柴笛」の原稿にはねかかった。彼は、かすり傷一つ受けなかった。〔中略〕

「図書館雑誌」2009.10号 社団法人日本図書館協会

塩尻市立図書館における古田晁と筑摩書房関係コレクション

内野安彦（塩尻市立図書館館長・古田晁記念館館長）

◆古田晁文庫

筑摩書房の出版物のみを配架したコーナーを「古田晁文庫」とし、入り口には郷土の偉人

である古田晁を顕彰するため写真と略年譜を掲示しています。

絶版となった貴重な『ちくま文庫』などを求め、市外からも多くの利用者が訪れるコーナーとなっており、長野県では突出した蔵書数となっています。

因みに叢書のコレクションは全国を見ても類のないもので、『ちくま文庫』2,291点、『ちくま学芸文庫』1,076点、『ちくま新書』790点、『筑摩叢書』352点（2009年9月15日現在）のタイトルを所蔵しています。すべての公共図書館の蔵書検索の結果ではありませんが、主要な図書館の資料検索をしたところでは、全国一だと思われます。

ほかにも、古田晁と親交のあった唐木順三、中村光夫、中野重治、草野心平、竹内好、上林暁、武田泰淳など、たくさんの個人作家全集を揃えています。また、つげ義春、滝田ゆうなど、個性豊かな作風で熱烈な支持を受けている漫画家の全集もあり、狭隘な図書館の中で独特な雰囲気を出しています。

新刊書も筑摩書房のものは他の新刊書とは別に、当該文庫の新刊コーナーに配架し、まさに良心の出版に生涯を賭けた“古田晁の心づくし”を図書館として現代に連綿と継承しています。〔中略〕

「DANKAI」2004.10 創刊号 長野放送

信州文学紀行 古田晁記念館 小林俊樹（長野県各高等学校勤務。日本山岳会会員）

階下（一階）の展示室にある臼井の色紙「ものが見えたる光 未だころに消えざるうちに言ひ留むべし」（芭蕉）は、この机に向って何千枚もの著述を遺した、唐木や臼井の事実が立証している。色紙といえば、古田が「日本にたった一枚の色紙だ」と言ったと伝える、中村光夫の下手な筆書きもある。木曾は菟原の徳山医師に贈ったとかの「満窓秋雨 感更多」である。唐木のそれは「ここに峠あり 雲に鳥」であり、貝塚茂樹は「山近起爐烟 齋心学自然」盛唐の自然詩人王維のそれである。他に宮本百合子の「けふも明日も 地球はまはつてある そして歴史は進みつゝ有る 抑へがたい事実の上に。一九五〇年三月」などもある。〔中略〕

「風紋 25 年」精興社 「風紋二十五年」の本をつくる会

三人の恩人 野原一夫

店の名の「風紋」は、小学生の頃の思い出につながっている。父の林画伯と外房の御宿（おんじゅく）海岸で暮っていたとき、風が立つと砂丘に模様を描かれた。その美しさが目の底に残っていた。

開店披露の当日、私は古田さんといっしょに、開店前の早い時刻に会社から直行した。椅子が八つしかない小さな店だということで、それに無料招待日で入れかわり立ちかわりの客

で混み合うだろうと思ったからである。まだ客はなく、私たちはビールを一本ずつ飲んだだけで引きあげたのだが、帰りぎわ、古田さんは内ポケットから紅白の水引をかけたお祝いを出し、むりやりといった感じで聖子さんの手の中に押しこんだ。

蓄財などまるでなく、開店資金はすべて借金でまかなった。仕入れた酒類の支払いは一ヵ月後にしてもらったが、おつまみなどを買ったら手もとに二千年しか現金が残らなかった。どれほどのお祝い金だったかは知らないが、古田さんのこと、少ない額だったはずがない。あのお金は、正直いって有難かったと、あとで聖子さんは私にいった。〔中略〕

酩酊志願 晒名昇

昭和三十六年の三月に神田小川町の筑摩書房に入社した。社長は知る人ぞ知る古田晁氏。古田さんのことは、『筑摩書房の三十年』『回想の古田晁』、また橋本千代吉氏の『火の車板前帖』、近くは野原一夫氏の『含羞の人』に詳しい。とにかく、入社第一日から手荒いアルコールの洗礼を浴びることになった。いや、それは洗礼などという生やさしいものではなく、暴風雨の如きものであった。

古田さんの酒は猛烈なはしご酒であったから、神田界隈をふりだしに、本郷、銀座、新宿と蜿蜒と続く。飲めぬ酒を委細かまわず注ぎ込まれる苦しさもさることながら、次なる店へ向かう車中が私には難行苦行であった。乗りつけぬタクシーのガソリンの匂いに、車の窓を細くあけて酸欠の金魚よろしく口をぱくぱくさせて、こみあげるものを必死にこらえ続けるのである。もっともこの我慢の連続が、のちに私の酒量を少しずつ上げていくことになったようである。

たちまち酔いつぶれる不甲斐ない新入社員をあとに残して、古田さんは次々に店をかえて先を急ぐ。気がつくと、次はどここの店にいるという伝言を聞いて跡を追うことになるのだが、一晩中かかっても追いつけないことはしばしばであった。

その年の暮れ方、風紋が開店した。〔中略〕

「古田晁記念館文学サロン 古田晁と太宰治を語る」

カセット資料。野原一夫氏の講演。

若山喜志子（わかやまきしこ） 歌人。1888-1968。塩尻市出身。

「信濃毎日」に投句して選者の太田水穂に認められ上京します。明治 45 年、若山牧水と結婚。牧水の死後「創作」を主宰します。

「若山喜志子全歌集 若山旅人編」短歌新聞社
無花果 桔梗ヶ原



夕焼空

枯木立木曾の天地（あめつち）赤に見え紫に見え人の
恋しき

枯木立秀（ほ）つ枝ににほふ紅の山はさびしく物やおも
はむ

見てあれば涙とぞなる丸き山ひねもす物に媚びやまぬ身に
山よゆるせたへがたくては身もはずうち対ひては流す涙を
いかなになげけどなげきはつきずこのたびはどこぞ入日に肌こがす国へ
ただ大きく黒き丸き鉢伏山ふもとの家のともし灯（び）のかけ
きりぎりすその生れたるそだちたるほしいままもて恋もすべれけれ
眼の底に空青く燃えやうやくに涙くだれば早も悲しき
涙にじみ仰ばわれにあやかれと淋しき空の遠方に陽の照る
神無月すゑともなればいちじるく葉の散らふことよ鳥ぞ恋しき
時雨ぞと戸を引きつつもひとりごつ母のうしろにそひて空みる
あはれこの身君が娘は黒髪のアたひしばしば枯草にする
わが髪の手すぢことごと落葉貫（ぬ）きまきてかざして死なむとぞ思ふ
冬草山消ゆるともなき野火ならんのろのろ燃えにいのちこげつつ

筑摩野

庭の草

ふるさとの信濃を遠み秋草の竜胆（りんだう）の花は摘むによしなし

巻末に

〔中略〕「筑摩野」といふのは私の故郷信濃国松本平一円の称で、私には最も縁故の深いところからそのまま名づけました。私はその筑摩野の南端日本アルプスを一望に見晴す高原の桔梗ヶ原に生れ育ちました。まだ四歳か五歳の頃の或る宵、母の背に負はれて田圃を歩いてみた事があります。それは春であったか秋であったか、空にはいびつな月が白く懸ってゐてその面を薄い雲が一すぢ二すぢ流れてをりました。私はそれを眺めてゐて一人遠くさまよひ歩くとでも言はうか、一種言ひやうのないやるせなさを覚えて涙が

とめどなくこぼれました。それが私の歌ごろともいふべきをおぼえた最初であったようです。その後長じて十二歳の初夏に

水車小屋へだて見ゆる苗代の小田に群れなく夕蛙かな
といふを詠んで、文学青年であった受持教師の K 先生に褒められた事など記憶の一つになってゐます。それから十七八歳の頃は画を描く事に熱中し、それがいつしか詩に移り、また二十歳頃から歌に変わってゆきました。〔中略〕

昭和五年八月末日

沼津千本原にて

若山喜志子

展望 信州崖ノ湯

枝黒き老木の柿に花かともまがふ明るき萌黄の芽立ち
あはれあはれ麦畑畔の草土手に淡べにの牡丹大きく咲けり
そろひ鳴く春蟬の声松山の新芽の穂だち揺るがにひびく
峯かけて鳴き競ふらし春蟬の声は次第に鳴き移りつつ
花田つづく松本平を一望の宿に寝ねつつ三日過ぎたり

補遺 昭和六年

「筑摩野」を編みつつ

恋しかる桔梗ヶ原よこの頃は雀をどしの鳴りかをるべし
故里を遠く偲べば仄かなる絵を見る如しも美しくして
父母の墓所ばかりの故里と思へばかなしその山川も
広重の桔梗ヶ原の絵を見つつ遠つみ祖を偲びたるかも
いつかしき四方の高嶺を越えがたみあこがれ泣きし乙女なりしか
駅路（うまやぢ）の洗馬郷原をかぎろひのはたてにぞ見し今もしからむ
いち早くれんげうの花咲きしかばほのかにひとを思ひそめける
ねいり花咲き盛る頃はけうとくてをとめ心に人をおそれし
山裾の松本町をかぎろひのおぼめく果に見つつ恋ひしか

補遺 昭和八年

はかなき夢

ふるさと長者ヶ原の翁草ほうけなびくを今夢に見つ
ゆめなりき馬頭観音の立碑（たていし）にゆららゆららの翁草見つ
ふるさとや父母も兄も姉すらもみ墓の土になりましにけり
ふるさとにのこる肉親（みうち）は誰と誰折りゆく指の五本に充たず
桔梗ヶ原の草分けなりし豪族の血統（ちすぢ）をほこる家に育ちき
幼どき祖父にききしは山犬に送りおくられ帰りし嘶
火縄銃ををりをりみがき居たまひし祖父は七十いくつなりけむ

煤びたる鴨居にいつも掛りみし火縄銃のことををりをり思ふ

「喜志子と静子」樋口昌訓 信毎書籍出版センター

静子の転居より

—明治44年4月2日の静子の日記によると—

私のかり住（ずまい）きし子さんのお家

田の中に生垣をした一構へ 屋敷の中を小川が流れ水車の音がのどかに響いてゐる 川岸の堤（どて）は柔い芽を黄色に吹いて居る まはりの田は一面紫雲英（れんげ）もそろそろ紅に紫がかつた小さい花を見せはじめの頃である 家の東田を二三枚へだてて田川が流れてゐる ゆるやかに流れる水の音さい（へ）きこゆる 川岸にはやなぎ、河原ささげ、ねむ、さいかち、棒木（はんのき）、いづれも青い、白い、やはらかい芽を香（にお）はせてゐる

朝日に光る若芽、夕日にしずむ若芽 私は川岸に立って これをながめるのがいちばんすきだ。

田圃中の一軒家 静かな住（すまい） 私はこうゆう家に毎日暮して行けるのが私にとっていちばんうれしい事である。

「評伝若山牧水 生涯と作品」短歌新聞社 （*長野市立図書館より相互貸借）

第五章 貧乏生活続く

〔中略〕三月十六日、牧水は望んでいた信州の旅に上野駅から出発した。この旅には短歌雑誌『自然』創刊運動と、帰郷中の太田喜志子に逢って結婚の申込みをすることのふくみがあった。彼女との結婚は水穂夫妻からも勧められていたのである。

〔中略〕当日（四月二日）喜志子は十六歳の妹桐子（後の長谷川銀作夫人となった創作社 闇秀歌人）をつれて信州村井駅のプラットホームに立って牧水を待った。

着いた汽車から牧水が降りてきた。紺の着物にセルの袴、烏打帽といういでたちで、手提袋を提げていた、喜志子一人だけで来ていると思っていた牧水は妹をつれていたのを見てひどく意外だったらしい。ともかく、その辺を少し歩こうと彼女を誘った。喜志子は汽車の窓で見送るつもりでいたのでこれも意外だったが、しかし文学愛好者の若き女性として、歌壇寵児の有名青年歌人牧水から、散歩を通して語る機会を得たことは、内心うれしくないわけではない。

三人は駅の裏手に出た。そこは桔梗ヶ原続きの静かな野原である。まだところどころ雪

が残っていた。その早春の野道はほとんど人通りもなかった。そして妹桐子も、その場の空気を多少察して、いつも 100 メートルくらい前を歩いて二人の話を妨げぬようにしていた。みちみち牧水は旅について語り、あたりの景色などについて語ったが、やがて「実は水穂さんとも相談して来たのだが………」と前置きして「自分と結婚してくれないか………」と切り出したのである。

〔中略〕桔梗ヶ原の野道五、六キロばかりを歩いて塩尻についたのはもう夕方だった。そして駅の茶店で一休みしている時に牧水は最近出版したばかりの『牧水歌話』を取り出して、その扉に「今日の記念に、四月二日、牧水、太田喜志子様」と書きつけて彼女に渡した。

鑑賞篇 (2) 長詩

(四月二十七日の喜志子あて手紙に同封された詩)

我が椿の少女に与ふる歌

わがいとしき少女（をとめ）よ
われ涙もておん身を愛す、
耐へがたきわが生命（いのち）の寂しさを愛するごとくに。

かつて笑ひしことなき少女よ、
そのさびしき胸に、
あはれ、
いかにしてひと本（もと）の花を植うべき。

ひとくれの土をにぎりて
土にこころのありなしを問ふことなかれ、
あはれ寂しき少女よ

ものを思ふな、
ただ、おん身を愛すといへ、
愛すといへ、

海底のあけぼのか
青苔のしめりに生（お）ひて
幹暗く、葉こそ嘆かへ、

その葉のかげに
日にもそむきて
うすくれなゐに咲いたる。
その椿をば愛すとよわが少女は。

地に生ふる名もなき木にも
時来れば
しのびかね芽の萌えぬ。

我等ふたりのいのちにも
知らぬまに
うす青く、芽こそ萌えたれ。

あはれ少女よ
われらが恋の
いかばかり
いやまして
さびしかるべき。

「日本の名随筆 94 草」（秋草と虫の音 若山牧水） 作品社

〔中略〕おなじく山国の花に、竜胆（りんどう）がある。春竜胆もあるが、秋がほんたうの竜胆らしくていゝ。

これは秋も末、冬のはじめの日向などに落葉に茎を埋められて咲いてゐるのが、ほんたうにいい。濃紫にいくらか藍のまじつたといふ様な深い色、それはどうしても落葉の早い山国でなくては見られない。

つづらをりはるけき山路登るとて路に見てゆく竜胆の花
散れる葉のもみぢの色はまだ褪（あ）せず埋めてぞをる竜胆の花を
さびしさよ落葉がくれに咲きてをる深山竜胆の濃むらさきの花
摘みとりて見ればいよいよむらさきの色の澄みたるりんどうの花
越ゆる人まれにしあれば石出でて荒き山路のりんどうの花
笹原の笹の葉かげに咲き出でて色あはつけきりんどうの花

また、
わが妻が好めるはなは秋は竜胆春は椿の藪花椿
〔中略〕

島木赤彦（しまぎあかひこ） 歌人。1876-1926。上諏訪町（現諏訪市）出身。

明治 42～43 年、広丘小学校校長に赴任。同校教員には、若山喜志子や中原静子がおり、赤彦が下宿していた牛屋は、作歌活動の文学サロンになっていました。

「広丘の赤彦」（塩尻市立広丘小学校 赤彦研究会）

日曜一信（明治 43～44 年まで「南信日日新聞」誌上に時事感想として発表された短文）

四月二日

三月二十七日午後五時再び桔梗ヶ原の林中に遊ぶ、
帰期明日にあり。旅装己に成って余す所四半日の無
事、長きこと千年の如し。悠々たる客心帰程の迫れ
るを悲しむか。年移り人変じて風物の猶依稀たるを
寂しぶか。暮色至れども帰らず、微雨至れども帰ら
ず。鮮苔色己に没して樹間猶微白あり。静寂太古の
如し。離別の情は斯くの如く静ならざるべからず、
斯くの如く寂しからざる可らず。酒を置き高会して
擾々たるが如き別離は、予の為に何の意味を成さ
ず。多謝すこの林あり。多謝すこの心あり。我と林と日没の静意に入って茫乎相自失す。



〔中略〕

○

桔梗ヶ原の土となり 瘦せたる松の木の下に 人を立たずに忍びんや

○

静かなる木よ残れかし 旅なる人よ去れよかし 愁ふる足よ歩めかし

寓に帰れば燈未だ点ぜず、炉辺の火鉢湯のたぎる音風に似たり。静を以て来り静を以て去る。桔梗ヶ原に感謝する只此の意のみ。 注：岩波書店 赤彦全集第六巻より

原新田

友は予に小説を作れと勧める。

ひよろひよろした貧弱な小松が同じ調子の莖立で果しない林を成（つく）って居る。木立を漏れる日光が明るい紋をつくって足先の苔鮮にこぼれる。明るい紋を踏みながら話し入っている二人は、林深く歩いて来た事を微かに自覚してゐる。〔中略〕

暫く無言に帰った時、最前林の道であとに取残された友の夫人と、友の歌の友である年若き婦人との事を思ひ出した。話が興に入って足の遅い婦人は、何時の間にか後れてしまったのである。二人は腰をおろして煙草を燻らした。煙草の烟が真直に小松の幹を伝うて上ぼる。桔梗ヶ原の冬木立には禽も鳴かぬ。静かにさに堪へた林の奥から暫くして若やかな話声が聞えはじめる。其のうちにくきやかな白い足袋が美しい裾をさばいて、鮮明な苔鮮の上を歩んで来るのが、木立の中からチラチラと見えはじめた。友は夫人を伴うて明日東京へ出立するのである。男二人に女二人加っても桔梗ヶ原の冬の林は寂しくあった。

明治四十三年三月 （「アララギ」第三巻第二号より）

「桔梗ヶ原の赤彦」川井静子 謙光社

川井静子・旧姓中原（1889-1956）

牛屋

下宿の先生

先生が、御赴任以来下宿なされていられたお宅は、広丘村原新田の太田玉吉さん方で、屋号を牛屋と呼んでいたが、決して牛商人でもなく、牛飼いで専門というわけでもない。いなかには珍しい上品な御一家で、生活状態も、実にゆったりとした名実共に、旧家であった。

〔中略〕

屋敷は、大変に広くて、四季おりおりの花が絶え間なく咲き、ことにぼたん、霧島、さつきの咲き誇るころは、実に見事だった。惜しいことに泉水の水は、ほとんど一年中枯れていたのので、先生はお座敷からながめながら、

「此の泉水に水がはいっていたら、ほんとにいいんだがなあ。趣向も面白いし、夜燈も自然石の形が、実に野趣深い。何にしても泉水に水がほしいなあ。水があったら申し分ない。」

何度惜しまれたことだろう。

先生と桔梗ヶ原

〔中略〕 変りゆく新緑の芽生えに、桔梗ヶ原は新鮮の気満ち、ことに五月中旬からたんぼ一面に咲き乱れた、げんげ花田の壮観には、ただただ驚嘆の目を見張って、

「実に見事だ。諏訪平には断然見られぬ風景だよ。」

とおっしゃられては、何度学校東方の鉄道線路を横切って、あの小高い土手の上まで行っては帰られたことか。

「今日は花田の中まではいって寝ころんでみたよ。からだの花でうもれてしまってなあ。」

子供のように袖をひるがえし、袴を払って喜んでおいでたこともあった。

げんげ田に寝ころぶしつづつ行く雲のとほちの人を思ひたのしむ 『馬鈴薯の花』

さんざん遊び飽きた先生は、うれしそうに笑いながら、校門から帰って来られるのが常だった。どんなにか、遠く離れ住む妻子、友人の上に思い走らせて瞑想に楽しまれた御事であろう。

妻子らを遠くおき来ていとまある心さびしく花ふみあそぶ 『馬鈴薯の花』

心寂しくあられても、家庭の煩わしさから、思いがけぬ一人住いのいとまある御生活は、ひそかの喜び心で、花田に悠々と遊ばれたのであった。

高出分教場行

〔中略〕 先生は足早においでになる。私も敗けまいと、あとについて登って行く。ようやく九里巾を登りつめた桔梗ヶ原に出た。

たんたんとした原野には、桔梗、女郎花も咲きはじめて、穂の出ぬ刈萱（かるかや）は原一面になびいていた。所々開墾された瘠畑には、粟が作られて、畑の畔（くろ）には茴香（ういきょう）がたけ長く茂りしげって、草道にまでおおいかぶさり、強いにおいと草いきれで胸がむかついてくる。白い小さな花は満開に咲いていた。

菅江真澄（すがえますみ）

江戸時代の旅行家。1754-1829。三河国で生まれたと伝えられています。本名は白井秀雄。本洗馬・釜井庵に1年2ヶ月滞在しました。「伊奈濃中路」「科野路旅寝濃記」「ふでのまゝ」「いほの春秋」、この4冊は、真澄が可児永通の家（釜井庵）で書いた最初の稿本だそうです。昭和4年、可児永通の子孫にあたる本洗馬の熊谷家において発見されました。

（資料：新編信濃史料叢書第十巻）

「菅江真澄遊覧記 伊那の中路」

天明3年、三河国を旅立ち、信濃国飯田～伊那谷～本洗馬に至る。旧知の洞月上人を訪ね、その紹介で医者可児永通の家に滞在することになる。

こうして塩尻について、昼食の中宿をとり、阿礼の社に参拝して、馬をいそがせ、たいそう広い野にでた。これが名高い桔梗が原（塩尻市）である。その昔、善光寺に般若経を奉納なさった某の君の牛が、長い旅に疲れはてて、この野に倒れ伏した。そのころは原の名も来タル経と書いて、ききょう原といったのである。また、この野辺に桔梗も多く咲くので、原の名とし、牛伏という寺もあるなど、馬をひく男が話してくれた。家が二軒あり、こがねもちといって、粟の餅を売っているの、馬子に与えると、「ああうまい、このこがねもち」というので、馬子に代わってたわむれの歌

春の夜の花にもかへじよく搗てこがねの餅のうまさは



（阿礼神社）



（桔梗）

木曾川（奈良井川。明治初年改称）のほとりにでた。木曾山中で見たのとは異なるが、同じ山の狭間から流れでているので、これも木曾川といい、渡してある橋を琵琶橋という。洗馬の宿場を左に見て、本洗馬という里に入った。〔中略〕



（琵琶橋）

大池村にある宗福寺の洞月上人と、昔、懇意にしていたので、その上人を訪ねたいという
と、ある人が聞いて、「〔中略〕今はこの青松山長興寺に再びでてきておられます」というの
で、それを幸いとこの杉木立（長興寺参道の）に馬をつないで門を入った。〔中略〕

「いほの春秋 熊谷本」 新編信濃史料叢書第十卷

本洗馬に来た真澄は、この山里の移り変わる四季の風物や、村
人の風俗などを詳しく記録した。

山家記

われしなのの国に來りて、かなたこなたをみんとて、しみつなかるゝ柳かけしはしと思ふまゝ、
ほとゝきすを聞、紅葉を折、雪を見、梅をかさすまで、おもへは一とせあまりになりぬ、あ
る日、可摩永といふ岡のひとつ家にあそひて、けふをくらしぬれば、やま住のこゝちしてけ
れば、いさ此さま、見しこと聞しことを、このいほりにたくへて、たゝう紙にしるしぬ、

天明四年辰春

筑摩郡棒庄旧洗馬乃里仁天

白井 秀雄 （稿）

やまさとの垣ねや春をへたつらん、をりしりかほの卯の花に、こよみなき山のおくも、夏と
はしりて衣ぬきかふるころなれば、たか身も木曾の麻きぬになりたるは、つらつきいとすゝ
しけにものしたり、むかつをに藤の咲みちたるか、松にもゆたけくかゝりたり、青葉をわく
るはなのしら雲は、たつねすともありなんや、初音よりをちかへり鳴郭公のこゑは、山住の
身のせにこそ侍らめ、まして五月雨のふりくらしたるゆふへは、むかしおもふ袖はいかはか
りかはありけん、〔中略〕

「政員の日記」 新編信濃史料叢書第十卷

本洗馬で歌を詠んでいた菅江真澄が、天明4年陸奥へ
旅立とうと思ひ立つ。日頃、真澄に傾倒していた三溝
政員は別れを惜しんだ。その時の日記である。

三河の国白井秀雄のぬし、しはしと此里に來まし給ふ、旅寝のまくらかすまへて、けふは
霜ふり月のすへのころ、なきたらちめの三年の魂祭る日にあたり給ふとて、設の台きよらか
に、たきものゝけふり手向の花なども、常にことかはりてしめやかに、たゝへことねころに
あまたゝひすし給へは、なき佛もそのまゝに、在し世の心地そし給んと、いと尊く、あわれ
もともに涙をおとして、かくなんよみてたてまつる、

そらたきのけふりにめてゝなきたまのありし三とせの佛そたつ

辰のとし

寄松祝

老のなみ幾千代かけて住吉の松はさかへのいろや見すらん

六月立秋

みな月のあつさなからも吹風はけふたつ秋の（秋たつけふの）しるしとぞ知る

〔中略〕

「信州と菅江真澄」柳田國男全集 12 筑摩書房

〔中略〕この一文を草した際までは、まだ信州に是ほど多くの、壮年白井氏の文章が残って居らうとは思はなかった。翁が晩年に整理した紀行の序文に、「洲羽の海」「菴の春秋」其他の数著のあったことを説いて居り、それが皆この間のものなることが察せられるので、或は信州のどこかに今も埋没して居るので無いかといふことを、よりよりは話して居た。ところが「来目路の橋」の刊本を読む人が多くなると共に、先づ方々から歌の短冊が出て来た。〔中略〕

殊に洗馬では真澄の出発を見送って、三日の間共にあるいた三溝政員の日記までも出て来たので、其後寛政十年の大火はあったけれども、それでもまだ何物か災厄を免れて、伝はって居るだらうといふ想像は強く、飽きずに搜索を続けて居るうちに、終に四冊の真澄自筆自装の写本を発見したのが、同じ年十月下旬の事であった。〔中略〕

日記の中にしばしば名に見える医師可児永通は、この人々の祖先であり、又長興寺の洞月和尚と共に、真澄の有力なる庇護者でもあった。斯うした人の家に保存せられて居たといふことは、たとへ子孫の者はもう知らずに居らうとも、単なる置き忘れてないことは疑ふ余地が無い。〔中略〕

「櫛の冬」瓜生卓造 木耳社 （相互貸借サービスにより、上田市立図書館から借りました）

洗馬村

〔中略〕村のほぼ真中あたりを西に折れると、細径の行詰まりに赤い鳥居が建ち、妙義山神社とある。背後は険しい崖山で、戦国の世、妙義山城主三村氏が山上に砦を構えた。山腹に台地がひらけ、右手の奥に草庵が見える。「釜井庵」という。真澄はここで天明三年五月から翌四年の六月まで、十三カの月日を送り迎えた。のち庵は火災に遭ったが、寛政七年に再建され、原型をとどめている、という。〔中略〕

真澄を草庵に住ませたのは、洗馬長興寺の洞月上人だ、といわれている。上人は古今伝

授の免許を持つ第一級の学僧であった。彼の感化薰陶もあって、洗馬には文雅の士が多かった。

真澄は村人たちに和歌や古典を講じ、自ら書を読み、日記を綴り、村里に杖を曳いた。〔中略〕

吉江喬松

フランス文学者・詩人・評論家。塩尻市生まれ。1880-1940。号は孤雁。

1916年渡仏します。ソルボンヌに学び1919年帰国。早稲田大学仏文科主任教授となります。フランス文学・文化の紹介の功績によって、1922年にフランス政府よりシュヴァリエ・ド・レジオン・ドヌール勲章を受章します。

「杜の家」(長野県文学全集 第I期/小説編 第1巻 明治編 郷土出版社)

四百年余も年を経た槻(けやき)が七本立困んでいて、周囲は、松、杉などの古樹がとびとびに取り巻いて、塀の壊(くず)れかかった芝生の土手を繞(めぐ)らし、その土手の下には、細長い濠(ほり)がこれに沿うて掘られている。この槻の樹の杜(もり)の中に立っているのが、自分の生れた家である。

四月の初旬(はじめ)自分は祖母の病気を見舞うために家に帰った。〔中略〕

「砂丘」(相互貸借サービスで塩尻市立図書館が上田市立図書館から借りました)

洗馬節

〔中略〕「梅雨晴れのわたくし雨や雲ちぎれ」—芭蕉が木曾の原から此駅(このえき)へ出て、駅を出抜けて桔梗が原へさしかゝつた時の吟だそう。緑の草に、雲の陰影が鮮かだ光にまじつて雨足早く、雲をこぼるゝ銀白の美しさ、いかにも、伸びやかな、狭い所から広い天地を眺めやる広々とした感じ、大原の爽かさを現はしてゐる趣きがあるが、其頃の洗馬の駅路の様は十分にはわからない。只其頃から残つてゐる大きな旅宿が、僅かに旧時の形見を見せてゐるばかりである。

家々の表戸は大方閉ざされて、二階の欄干から軒へ、蚕飼用の竹籠が雨除けに立て並べてある。暗い家の中には、人が住んでゐるとも思はれない。青草を茹つて、高く馬に積んで、通つて行くもの、枯木を背負つて、とぼとぼ山から帰つて来るもの、駅路は真昼時でも、他に行客の姿すら見られない様だ。

旧時からうたひ伝へて来た「洗馬節」といふのが、今でも残つてうたはれてゐる。追分節に似た節で、一種の寂しい離愁を催させるやうな調子がある。〔中略〕

「吉江喬松(孤雁)の詩」 吉江嘉教
(「文芸しおじり 春号 39 巻 1 号」)

臨終の笑

君がゑまひの優しきに
我世やすしと思ひてき



なほざりなりし其が罪を
許したまひしるしかや

胸に刻みし其微笑
今は希望の光にて
闇に導く一すぢの
盡せぬ君が恵なる

冒頭に掲げた詩は明治三十六年秋、逝った母君の臨終の笑を思い、追慕の情に耐えかねて詠んだ美しい詩で、孤雁が早稲田大学二年同人誌「新文学」の創刊号を飾った母堂追悼の詩群「おもかげ草」の一篇であるという。

孤雁と同学年で、孤雁の次の文学部長になった英文学者日高只一氏は「実に母堂臨終の微笑こそ一生君が行手の光となって、君を導き、君が人格にも、言動にも、文章にも豊かな潤ひと、温か味となって現はれた。」と孤雁追悼文の中で述べている。〔中略〕

「山国の女性」（「信州こども文学館 5 語り残したおくり物 あしたへの道」）

目をあぐれば四方に山がある。その山の頂線にたれかかる空のうつくしき、信濃に生まれた人々でこの空のうつくしきに心ひかれない人はないであろう。高原にのぞむ空の美は、とうてい平野の人々には想像ができぬであろう。

このあおいで空のうつくしきを見るという習慣は、高原をはなれて、長く都会地に住みなれた人々にでもわすれられぬことのようにある。窪田空穂君の歌集を読むと、いたるところにこの空の美にうたれる感じがうたい出されている。ハイランダーとしての旧慣（古い習慣）を、この人もうしなわずにいるのだなあという感じを、わたしはしばしばするのである。

〔中略〕

山国の空のうつくしきは、同時に山国の女性の目のうつくしさである。かの女らの目は空のかがみである。かの女らのこいききょう色の、もとめてやまぬひとみの力にうたれぬ異性があるであろうか、高きをのぞみ、うつくしさをもとむる心の反映である。〔中略〕

「ゲーテ研究 百年祭記念 早稲田大学欧羅巴文学研究会編」三省堂 1932 年

「ウェルテル」と初期仏蘭西ロマンティックに現はるゝウェルテル型の作品

吉江喬松

ゲーテの「ウェルテル」が出版されたのは千七百七十四年であり、それが初めて仏蘭西語

に翻訳せられたのは、その翌々年の七十六年、端西人の Deyverdum によってであり、この翻訳書は千九百九十四年までに五回版を重ねてゐる。それとはまた別に、千七百七十七年、Schmettan 伯が Anbry といふ名で「ウエルテル」の訳書を出してゐるが、それは“Passion de jeune Werther”と題したものである。(Baldensperger: “Goethe en France” 参照)

併し革命以前に於ける仏蘭西では、「ウエルテル」は寧ろ冷遇せられ、充分な理解は得られなかった。当時の文芸評論家 La Harpe でも Grimm でも、それを特殊な異常な或は卑俗な現象として取扱つてゐた。大革命の嵐の後になって、「ウエルテル」は到る處に深刻な同情者を見出したのである。この革命前に於ける「ウエルテル」の冷遇は、仏蘭西に於ける社会環境がいまだそれほど切迫せず、人々の心の動き及び感知性は「ウエルテル」を受け入れるまでは流動を開始してはゐなかつたのである。それは即ち独逸に於ける“Sturm und drang”現象は、それが政治革命に爆発しなかつただけ一層内抗し、一層鬱積してはゐたが、仏蘭西の行動的
政治革命に遙かに先行してゐたことを示すものである。〔中略〕